

令和8年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【大谷場東小学校】

学力向上
アクションマップ

①	今年度の目標と学力向上策
重点的に育成する 資質・能力	(1)デジタルとリアルを使い分け、様々な情報を取捨選択して活用する資質・能力 (2)自分の考えを整理し、筋道を立てて表現する力
↓	
実施する学力向上策 【時期・頻度】	・動画や画像の提示と実物の観察などの体験を組み合わせ、デジタルとリアルを効果的に統合した授業を展開する。【通年】 ・「個別最適な学び」を推進し、校内で授業公開や教材研究を行い、指導力の向上を図る。【通年・全教員年2回以上】 ・様々な教育データを「スクールタッチボード」で可視化し、次時の指導に生かす【通年】 ・ICTを活用して、調べる、学ぶ、話し合う、聞く、作る、協働するなどの学習を取り入れる【各単元で1回以上】 ・表現方法の工夫、温かい人間関係づくりなどを通じ、誰もが発言しやすい環境を整えることで表現力を高め、学級経営を含めた授業力の向上を図る。【通年】

⑤	年度末評価	
学力向上策の 実施状況	評価(※)	1.結果分析(管理職・学年主任等) 2.詳細分析(学年・教科担当) 3.分析共有(児童生徒の実態把握)
↓		
今年度の成果と 次年度の課題		

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一步)

④	さいたま市学習状況調査結果の分析
特徴的な結果	
↓	
結果から考えられる 児童生徒の実態	1.学校全体での取組 2.単元テスト・定期テスト 等の分析・活用 3.中間評価を経た取組 4.調査結果を活用した授業

②	全国学力・学習状況調査結果の分析
特徴的な結果	本校の平均正答率は、国語、算数いずれも県平均・全国平均を大きく上回っている。また、中央値や四分位の状況から、上位層だけでなく中位層から下位層まで幅広く学力が定着していることがうかがえる。国語では「話すこと・聞くこと」や「情報の扱い方」、算数では「変化と関係」や「図形」の領域で高い正答率を示しており、情報を整理・活用しながら考える力に強みが見られる。一方で、国語の「集めた情報を引用して、自分の考えが伝わるように書く」問題での正答率が低く、「根拠を示しながら文章で表現する力」が必要である。算数の「データの活用」、記述式問題は他の領域に比べて正答率が低く、考えや根拠を文章や数式的な表現で説明する力に課題がみられる。
↓	
結果から考えられる 児童生徒の実態	基礎的・基本的な内容の定着だけでなく、学んだことを活用して考える力も育っていることがうかがえる。特に国語の「話すこと・聞くこと」や算数の「変化と関係」「図形」の領域で高い成果が見られ、相手や目的を意識して考えたり、情報や数量の関係を整理して判断したりする力が身に付いていると考えられる。 一方で、国語の「書くこと」や算数の「データの活用」、記述式問題の正答率は相対的に低く、資料や情報を基に自分の考えを根拠立てて説明する力には課題がみられる。このことから、児童は思考する力や学習意欲は高いものの、考えた内容を論理的に表現する力についてはさらに伸ばしていく必要があると考えられる。

③	中間評価	
学力向上策の 実施状況	評価(※)	1学期は、温かい人間関係づくりによる発言しやすい環境構築(96%が意識)や、デジタルとリアルの効果的な統合授業(84%が意識)が高水準で実践された。各単元でのICT活用も7割超で定着し、児童の思考・表現を深める協働的な学びの基盤が整ってきている。一方、スクールのタッチボードの指導への活用(「意識した」は8%)は定着途上であり、教科間での活用差や個別最適な学びの具現化が課題として挙げた。2学期以降は、教育データの活用を促進するとともに、単元全体を見通した教材研究と授業公開を重ね、探究的な学びの充実と更なる表現力の向上を図る。
	B	
↓		
学力向上策の 見直し	変更なし	

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一步)

教育研究所

令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【大谷場東小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	・学力の二極化がみられるため、スクールダッシュボードを活用して個々の理解度を把握し、授業改善に生かしていく。また、引き続き本校の研修テーマである「個別最適な学び」に結び付けて取り組む。 ・用語と実際の現象や事象を関連付けるため、デジタルで動画や画像を提示するだけでなく、実物の観察などリアルな体験を組み合わせ、デジタルとリアルを効果的に統合した授業を展開する。 ・図や表、グラフなどから読み取れることを言葉で表現することに課題があるため、語彙力向上に向けて読書の機会を増やし、言語化する力を育てる。
思考・判断・表現	・協働的な学習を通して、間違いを恐れずに解答できる児童を育成しようと努めているが、発言が特定の児童に偏ってしまう場面もある。意図的指名や発表以外の表現方法の工夫、温かい人間関係づくりなどを通し、誰もが発言しやすい環境を整えることで、学級経営を含めた授業力の向上を図る。 ・問題の資料を基に選択肢から解答することはできているが、記述問題になると解答できない児童が多い。記述の仕方を身につける必要があるとともに、自分の考えを整理し、筋道を立てて表現する力が課題である。ICTを活用し、表現力を高める授業の充実を図る。

	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	＜学習上の課題＞ ・多くの児童が基礎的な知識・技能の定着を図れているが、二極化している。 ＜指導上の課題＞ ・児童の理解度を把握し、指導に生かしたり、個に応じた指導を展開したりする必要がある。	⇒ 本校の研修のテーマである「個別最適な学び」を実現するために校内で授業公開を行い、指導力の向上を目指す。【通年・全教員1回】 ・「スクールダッシュボード」を活用して、児童の理解度の把握に努め、次時の授業に生かす。【通年】 ・授業のめあてを工夫し、学習の目標を児童が決められるように授業を展開する。【通年】
思考・判断・表現	＜学習上の課題＞ ・児童は失敗を恐れる傾向があり、自分の考え・思いを表現することが苦手である。 ＜指導上の課題＞ ・デジタルとリアル両面のよさを生かして様々な表現方法の指導をしていく必要がある。	⇒ 評価の観点を明確に示し、児童が表現の仕方を見通しをもって進められるようにする。【通年】 ・様々な意見を受け入れられる雰囲気を作るために、互いに認め合える学級経営、授業経営を行う。【通年】 ・ICTを効果的に活用して、学習モデルや様々な表現方法を示すと共に、協働的な学習を進め、表現したいと思える課題を工夫する【通年】

⑤	評価(※)	学力向上策の実施状況
知識・技能	A	「個別最適な学び」を実現するためにすべての教員が校内で授業公開を行うことができた。参観した教員が参観シートにより、改善点を記入し、職員室に掲示した。指導力向上のための様々な方策や指導法に触れることができた。また、校内でスクールダッシュボードの活用研修を行い、活用の仕方を学んだ。教職員アンケート「スクールダッシュボードの活用」の項目で肯定的な回答が70%となり、個々の児童理解を深めて、授業を展開する教職員を増やすことができた。またスクールダッシュボードだけでなく、ノートに振り返りを書かせて、次の授業に生かす教員も見られ、デジタルとリアルを使い分けて、個に応じた指導を意識的に行った。
思考・判断・表現	A	教職員アンケートによると、授業で評価の観点を示している教員は96%、ICTを活用して学習モデルや表現方法を示した授業は89%、表現したくなる課題の工夫は100%、協働的な学習への意識は92%が肯定的な回答であった。評価の観点を示すことで、児童は「どのように表現すればよいか」を考え、自分の思考を整理して表現に生かすことができたと考えられる。授業公開では、算数で問題文に線を引いたり、自分で類似問題を考えてりする学習活動や、協働的な学習を意識し、間違いを恐れずに解答しようとする姿を促す授業が多くみられた。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	すべての教科の正答率について、国や県の正答率の平均を大きく上回っている。国語の正答率は7割後半から8割となっている。算数については8割弱の正答率であるが、2(2)台形の意味や性質についての問題の正答率が5割強のため、図形、特に台形を構成する要素について習熟を図る必要がある。理科においては、2(1)身の回りの金属の電気を通す物、磁石に引き付けられる物があることの知識についての問題の正答率が低かった。鉄だけが有する磁石に引き付ける性質を理解できなかった、日常生活で磁石を使って、様々な金属で試す機会があるといふと考える。金属が電気を通さないと回答する児童も多かったため、電化製品で使われている金属について、授業で取り上げることも有効であると考えた。
思考・判断・表現	全教科の正答率は、国・県の平均を上回ることができている。しかし、国語の「話すこと・聞くこと」に関する平均値の差はわずかであるため、課題と考える。1-の目的や意図に応じて、話題を決め、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討することができるかどうかの問題で、話し手の意図を読み取る力に課題がある。また、3三(1)の目的に応じて必要な情報を見つけることができるかどうかの問題でも正答率が下がっており、必要な情報を整理して読み取る力にも課題がある。算数については、表現力・記述力や問題の意図を理解して答えるための読解力に課題がみられた。普段の授業から、問題の意図を読み取る力や答えを自分で表現したり、考えて記述したりする機会を増やすといふと考える。

①結果分析(管理職・学年主任等)

②詳細分析(学年・教科担当)

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	・校内の授業公開は、2学期から行う予定である。 ・スクールダッシュボードの活用については、教職員へのアンケートで肯定的な回答が42%にとどまっている。使い方を知り、使いやすさを実感できるようにする必要がある。 ・学習の目標を児童が自己決定できるように、授業のめあてを工夫している教職員は96%に上った。引き続き、授業のめあてを工夫して、個に応じた指導を行う。	・スクールダッシュボードの活用方法の研修を行い、身近に使いやすくする。【9月】
思考・判断・表現	A	・教職員アンケートによると、授業で評価の観点を示すことは85%、ICTを活用して学習モデルや表現方法を示した授業については88%、表現したくなる課題の工夫は96%、協働的な学習への意識は全職員が肯定的な回答をしている。 ・児童が表現方法を紙でリーフレットにしたり、ICTを活用してスライドを作ったりして発表していた。学年が上がるにつれ、表現方法の工夫がみられた。	・問題の意図を読み取れるように、授業の中で問題文を確認したり、答えの理由を考えさせたりする。【通年】

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	すべての学年・主要教科の平均正答率は、概ね市平均を上回り、基礎の定着が確認できる。高学年では4教科で優位性があり、算数は「図形」「データの活用」などで高水準であった。一方、縮尺を用いた実長の算出や図形構成の見取り、複合グラフの読み取りでは伸び悩み設問がみられる。理科は、知識の想起と観察結果の結び付けを意識した指導が有効と考える。また小4算数では、敷き詰めの図から平行四辺形を見付ける、グラフの読み取りで選択肢が分散し、根拠確認の徹底が必要である。理科の基礎概念が相対的に低いため、用語と現象の対応付けに弱さ(例:電気・磁石、気体や溶解の基本)がみられる。算数のデータ・資料領域でミスが目立ち、表・グラフの精読に課題がある。そのため、理科では、実物と用語を結び付ける授業が有効であると考えられる。また、算数(資料領域)では、表・グラフから読み取れることを言葉に変換する学習が考えられる。
思考・判断・表現	全体として市平均は上回るが、目的把握→情報整理→根拠提示→表現のプロセス型課題では市との差が縮まる場面がある。国語は「話す・聞く」「書く」において段落構成・理由付け・相手意識が弱い設問がみられる一方、資料活用の記述は学年によって二極化がみられる。算数は設問意図の読み取り→図表での整理→筋道立てた説明の精度が得点差に直結しており、図・表・言葉の三点セットで思考を可視化する授業が効果的と考える。算数の関係把握と式選択(割合・比の場面設定でつまづき)が課題である。国語は概ね高位だが設問間でばらつき(資料の引用の仕方・段落構成などで差が出る)がある。そのため、主張・根拠・具体例・結論の順に、自分の考えを展開できるようにする。